

# 徒然草雜感

赤尾敏弘

つれづれなるまゝに、日ぐらしすゞりにむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

此の徒然草の冒頭は徒然草なる語を口にすれば誰しも思ひ浮んで来る馴染み深い所であらう。私には此の冒頭はよく兼好の隠遁者としての氣持、その生活を表はすと共に、又隨筆としての文學的性質を表現してゐると思はれて特別の興味があり、此の一節が序段とされてゐる所以も察知出来る様である。此の冒頭を思ひ浮べる度に之を學んだ當時の師、心境、周囲の友の事迄思ひ起し隠遁者の氣持に浸つて行ける様な氣がする。然し藤岡博士の考證に依れば此の徒然草は兼好が五十歳前後の述作である様に見え、それは確かに老年の作であるからその年齢だけでも心境文學たる徒然草は鑑賞すべく私には遙かに距離がある。然し苦勞人の兼好は或は微笑だけですまして呉れるかも知れぬから思ひつくまゝによしなし事を二三綴つてみたいと思ふ。

## 徒然草と淨土教

兼好の實家卜部家は元來神道に關係ある家であるが、彼は次兄と共に神詠部類十五卷を編んだと云はれる程神道の

素養があつた。又彼は老壯儒の所説にも通曉して居り、それらの思想はうまく調和され日本化され、徒然草の隨所に伺はれる。然し徒然草の論旨の主流をなすものは勿論佛教思想であり、徒然草はそれを基調として脱俗悟道を説いたものであると云ひ得る。

兼好の長兄大僧正慈遍が延暦寺にゐた關係から法師は叡山横川に入り剃髪した。だから天台の僧侶であり天台の教理はよく學んでゐる。然し乍ら兼好の究極理想として説く所は佛道を成ずる事であり、それは人格の完成に外ならなかつた。従つてその爲には形骸的な皮相的な乃至抽象的な論議を事とするものではなかつた。天台家とは云へ殊更他の法門を云々する如き事なく信仰生活に於ても素直な無我な態度に生きる事を求めたのである。殊に我宗祖の無我な態度、その教への純一無雜性素直さ心安さに深く感銘を覚え、彼の信仰生活に影響する所は極めて大きかつた様である。即ち宗祖を始め鎌倉時代の念佛者廿餘家の法語を集録せる一言芳談抄は彼に依つて紹介されて居り、それによつてその書の廣く行はれ、感化の大なりし事を知り得るのである。即ち九八段には

たふときひじりの云ひ置きける事を書き付けて、一言芳談とかやなづけたる草子を見侍りしに心にあひて覚えし事ども、

一、しやせまし、せずやあらましと思ふ事はおほやうは、せぬはよきなり。

一、後世を思はん者は、糞汰瓶ジンタガ一つももつまじきことなり。持經、本尊にいたるまで、よき物をもつ、よしなき事なり。

一、遁世者は、なきにことかけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一、佛道をねがふと云ふは別の事なし。いとまある身になりて世の事を心にかけてぬを第一の道とす。

此の外もありし事どもおほえずと、又明らかに一言芳談抄に據つて書かれたものとしては

(前略)昔ありけるひじりは、人來りて自他の要事をいふ時答へて云はく「今、火急の事ありて既に朝夕にせまれり」とて耳をふたぎて念佛してつひに往生を遂けけりと、禪林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、あまりに此の世のかりそめなる事を思ひて、しづかについるけることだになく常はうづくまりてのみぞありける。(四九段)

(一言芳談抄三資居服食に依る)

又三九段に

或人法然上人に、「念佛の時、睡におかされて行をおこたり侍る事いかゞして此のさはりをやめ侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど念佛し給へ」とこたへられたりける、いとたふとかりけり。又「往生は、一定とおもへば一定不定と思へば不定なり」といはれけり。これもたふとし。又、「うたがひながらも念佛すれば往生す」とも云はれけり。これも、又たふとし。(一言芳談抄安心に依る)

兼好が三度も尊しと繰り返して言つてゐるのは彼が宗祖の他力念佛信仰がいかに我を離れて唯一途に彌陀にすがるといふ素直さ安らかさに満ちてゐる境地であつたかに憧憬と敬慕の情禁じ得ぬものがあつたに違ひない。又

是法法師は淨土宗にはじすといへども學匠をたてず、たゞ明暮念佛してやすらかに世を過ぐる有様いとあらまほし

と云つてゐるのも彼が天台教學に可成り深き理解を持ち乍ら、その高遠な哲理を説かうとしなかつた事からも首肯出來、彼は又淨土宗の、小さな智慧はからひを捨て愚痴に還つて專修念佛すると云ふ行き方をあらまほしきものと大いに共鳴したのであらう。之は又信仰の話ではないけれども宗祖の門弟竹谷の乘願房が亡者の追善に何が利益多いかと東二條院に尋ねられた時自分の宗派の念佛をと答へたかつたが、それが追福に巨益あると説いた經文を見てゐなかつたから、經文に確かな光明眞言寶篋印陀羅尼と答へた話（二三段）等も竹谷上人の我を立てぬ素直な態度を好ましく書いたものと思はれる。

以上の外に徒然草には善觀房に依つて六時禮讀法事讃に節墨譜が定められた事（二七段）謝靈運は法華の筆受をした程の人であつたが、心に常に機を得て事をなさんとしてゐたから慧遠法師は白蓮社の交を許さなかつた事（一〇八段）等淨土教に關係ある言辭多き所よりして兼好は隱遁者として、實際信仰生活には宗門固執は少しも織り込まれず、唯佛の道にいそしみ專修念佛の法門を尊きもの有難きものと受けとり、彼の信仰生活を餘程大きく支配したものと考へられるのである。

## 兼好と恬淡

兼好の趣味的な態度よりしてそれを基調として彼の現實の趣味生活論を誘引する事は可能である。彼の趣味、好むなるものは極めて廣汎に亘つて居り、それを輕々に論ずる事は出來ぬが彼が王朝文化に深い理解を有してゐる所より尙古的貴族的趣味に憧憬し、それが中樞をなし靜寂な淡泊な落付きのある生活を好んでゐた様であり、それは洒脫の

一語に盡きると云はれてゐる。然し乍ら現實生活は自分の趣味好み、云はゞ理想通りに行くものでない事は、彼程の苦勞人には知り過ぎる程知つてゐた筈である。

一體法師は長明が世を怨んで出家遁世し人生に愛着捨て難く、その遁世も徹底する能はざると異り、解脱の境地より再び人間生活に立歸つて種々物語つてゐる様に思はれる。従つて隱遁者らしく欲を成じて樂とするを斥け無欲恬淡を好ましきものとするがそれは誤つた禁欲主義者ではない。(それは釋尊に於けると同様である)朝夕無くてかなはざらん物こそあらめと安らかな少欲知足をすゝめ當然節儉を勤めてゐるのである。

身死して財殘る事は、智者のせざる所なり。よからぬ物たくはへ置きたるもつたなく、よきものは、心をとめけんとはかなし。こちたくおほかる、まして口をし。「我こそ得め」など云ふものども有りて、跡にあらそひたる、さまあし。後はたれにと心ざす物あらばいけらんうちにゆづるべき。朝夕ooooooooooooなくてはooooooooooooかなはooooooooooooざらん物こそあらめ其の外は何もたでぞあらまほしき。(一四〇段)

又衣食住僅かに足つて靜かに過すをたのしみとし、その外に人には病があるから藥を加へてその四つ缺けぬのを富とし此の外を求めるのが奢であり、四つが儉約ならば何人も不足は無い筈だと簞瓢陋巷の樂に安んじ、(一二三段) いやしくも萬にきよらをつくしいみじと思ひ、所せきさましたる人こそうたて、おもふところなく見ゆれと云つてゐる(二段) 又有名なる松下禪尼が明り障子の破れた箇所をつぎ張りを自から爲した話を記し、世を治むる道儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへりと感歎措く能はずありたき心掛と共鳴してゐる(一八四段)。又時頼入道が平宣時朝臣と召して酒をしたゝめるに臺所より小さき土器に味噌を取り出し、それを肴として愉快に數杯を傾けたと云ふ少欲に

安んじる屈託無さ心安さをゆかしく覺え、次の段と共に質素儉約の様を述べてゐるのである。彼のかうした趣味の少欲知足の生活は現代の物主心従の世には凡そ迂遠なものとも思はれるが、自分等青年僧侶の理想として之等の事は何かしら尊きもの願はしきものと感ぜざるを得ないのは強ち吾人のみではあるまい。十八段には昔から賢人の富んだ例はない様に人は己れを節し奢を退け名利を貪らぬのが望ましい。許由も何一つ身につけず手で掬水して飲んで居り、人から瓢を貰つてもそれさへ煩はしいと捨てた。そんなに執着を離れると如何に心の中が清々しからうと佛教の解脱の境地老壯の虚無の極地を述べてゐるが、兼好は常にかうした境地にあつたのである。

## 兼好と酒

世俗の事は充分経験し盡し所謂苦勞人としての兼好は長明や西行と異なり、さらりと執着を離脱し解脱の境地より俗世間に立歸り生を楽しんだ様に感ぜられると云ふ事は前にも述べたが、酒の問題に關しても同様の事が伺はれる。彼は友とするに惡き者七つありとして第四に四つには酒を好む人と云ひ（一七段）又酒の害に關しては一七五段に詳しく説いてゐる。即ち始に酒を飲まさるゝ迷惑を論じ、假に我國に斯様な愚な習慣無くして外國にある事だとして我々はどれだけ奇怪な習慣もあるものだと思ふだらうかと、第一節を結び第二節に醉人の醜態を述べ、飲酒は現在に勿論來世に對しても害こそあれ利は毫も無いと梵綱經の所説に依つて説いて居る。又八七段には下部には酒を飲ますに要心すべきことと冒頭し下部の狂態を活寫してゐる。然し考へるに之等は所謂「悪い酒」であり、隱遁者であり、僧侶である兼好ならずとも誰しも首肯出来る事柄である。然らば彼兼好は酒を飲む事を全然擯斥したかと云ふに決し

てさうではない。彼が酒呑みの心理を知る事は驚くべきであり、酒は風流人には無くてもならぬ風流の友であつたのである。即ち彼はその畫く理想人として第二段に下戸ならぬこそをのこはよけれと斷案を下してゐるのである。之は前に對し所謂「善き酒」と見らるべきものであり一見矛盾の如く見えても決して懂着はない。彼は戀の情趣をも解した粹法師と呼ばれる位であり、繊細な味はひを好む風流人であつた。一七五段の第四節には

斯くうとましとおもふ物なれど、おのづから捨てがたき折もあるべし。月の夜、雪のあした花の本にても心長閑に物がたりして盃出したる、萬の興をそふるわざなりと上品な酒宴の趣を述べ、かうした場合酒も捨て難いものであり上戸は無邪氣なものでさうしたものは面白いと云ふのである。以上の外に酒に關しては一五八段、一五七段、一二五段等にも閃見するのであるが、酒の害惡の惡むべきは知つても又反面その無くてはならぬものとして愛したのである。かくてこそ吾々にとつて兼好の人柄に完成に對する様な親しさ懷しさを覚え、甘きも酸きも噛み分けた苦勞人としての彼の面目躍如たるを覚えさせ、本書が世の注目を引き愛讀せられ殊に文人趣味の人がその趣味的な態度に懂れを以て珍重するに至るのであらう。徒然草は實に嬉しき存在である。